

# 古民家再生の第一人者 熊田孝さんにインタビュー

2019年11月15日

熊田建築研究所 京都オフィスにて。

熊田建築研究所ホームページ

<https://www.kumada-arc.com>

聞き手：なんかこう西洋というか現代的な家には無いよさを感じます。

熊田さん(妻)：ちょっと落ち着く感じはあるね。

～はじめに～

聞き手より、空き家問題について調べていて、解決策を考えていることを話しました。

古い建物がもっと評価されて市場に買われるようにならなければいけないとっていて、そのためにはどうしたらよいか等についてお話しを伺いたいとお願いしたところ、

まず、ご自身が所属する「古材文化の会」の資料を見せてくださいました。

( )内・□枠内は、聞き手が後から調べて補足しました。

熊田さん：古材文化の会、

2か月に1回ずつこんなの出していて（会報「古材文化」）

ぼくらの活動していることが色々と紹介されている。

古材文化の会には、

見守るネット部会

コモ (KOMO)部会（古材文化の会 伝統建築保存・活用マネージャー会）の略称。）

利用相談部会

企画部会

などの部会があって、結構いっぱい活動している。

古材文化の会ホームページ <http://kozai.or.jp/>

文部科学省の Web サイト内でも紹介されている。

[トップ](#) > [教育](#) > [生涯学習の推進](#) > [民間教育事業の振興](#) > [教育関係 NPO 法人の活動](#)

[事例集](#) > [Vol 4-1 まちづくり](#) > [特定非営利活動法人 古材文化の会](#)

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/ikusei/npo/npo-vol4/1316828.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/npo/npo-vol4/1316828.htm)

熊田さん：ヘリテージマネージャーが最近メジャーになってきていて。

歴史的な建物が全国にいっぱいあって、そういったものをどうしていったらいいか困っている人が多くて、それを守っていきたいと思っている人たちが、ヘリテージマネージャーの養成講座を受講して、卒業するとヘリテージマネージャーとして認めてもらって活動できる。そのネットワークを作っている。

(日本建築士会連合会 全国ヘリテージマネージャーネットワーク協議会)

毎年大会をやっているんだけど、今年は函館であって、そのことも書いてあります。

ヘリテージマネージャー（歴史文化遺産活用推進員）とは

「地域に眠る歴史文化遺産を発見し、保存し、活用して、地域づくりに活かす能力を持った人材のことです。」 日本建築士会連合会 Web サイトより

<http://www.kenchikushikai.or.jp/torikumi/hm-net/index.html>

熊田さん：京都では、京彩（きょうさい）といって京都彩る建物や庭園というのを京都市がやっています。市民が、残したいと思う建物を京都市に推薦する。京都市が、所有者に「推薦されているけれど認定してもいいですか」と相談して、よいとなったら（選定リストにあげて調査や審査などを経て）認定する。所有者に建物の価値をわかってもらおうという意味のこと。

聞き手：選定されると補助とかあったりするんですか？

熊田さん：選定の場合は、補助金はないけど、盾みたいのがもらえて。

認定の場合は、盾と補助金。

補助金の額は、キャパがあっっているんな人が申し込むのでそんな多くはないけれど、

それ以外にもいろんな制度が京都市にはあって、歴史的建物に対しては補助制度をつくっている。

聞き手：観光で稼ごうとしているからでしょうか？

熊田さん：そうそう、そうなんよ。歴史的建物を外国からみんな見に来るから、それを観光資源として残したいというのもある。

京都を彩る建物や庭園

(京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課の Web サイト)

制度についてのページ <http://kyoto-irodor.com/seido.htm>

熊田さん：僕がやっている仕事で、これは島根県の出雲で、だいぶ昔のだけど、

築 150 年たった建物を残して活用してもらおうとか。

高齢者になると、民家とか町屋とか昔の建物は、段差があったりして生活しにくい。

今みたいにバリアフリーとかいうものが考えられていない、考えていないというわけではないけれど、日本は、雨が多く湿度が高くて、木造だから、高床にしないと建物が傷みやすい。その分、地面から上がるからどうしても段差が必要になってくるわけ

日本という環境で木造という建物であるうえで避けられない部分があって段差がある。

ただやっぱり高齢者になってくるとそれが厳しいから、それに対して配慮して使いやすいようにしてあげることができれば使い続けられるかなと。

若い世代の人たちと一緒に同居して住めるようにもしたいし、そういう意味でのリフォームをしています。

熊田さん：また、京都の醍醐にある、江戸末期くらいにできた建物を直しました。

聞き手：これはなにか指定を受けたやつですか？

熊田さん：これは国の登録文化財になった。京都市の**景観重要建造物**にもなってる。

## 景観重要建造物

京都市の景観重要建造物の制度について

<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000097154.html>

これもやっぱり所有者の人が大事に残していきたいという思いがつよくてたまたま僕が調査でこの辺を歩いていた時に「あ、これはいい建物だ」と思って、そこを尋ねた。話をしていくなかで聴いていたら文化財にもなっていないということで「文化財にしていきましょう」という話をした。

だって維持費がたいへんなので。茅葺の屋根を直すだけで 500 万くらいかかるどっからお金だすんだって話し。高齢者だし。

それが、京都市の景観重要建造物になれば、直すときにかなり補助がでるから。

聞き手：景観重要建造物になれたんですね！

熊田さん：なれた、そのことで所有者の人はだいぶ助かっている。

近所の小学校から見学に来たりもしているよ。

聞き手：よく聞く重要文化財というのは？

熊田さん：重要文化財はなかなかならない。立派なお寺とかでない。

登録文化財は、国が登録するけどお金がでない。

価値的には、景観重要建造物と同じくらいで、みんなが「あ、すごいな」って感じにはなる。

なので、両方やっておけば、そこそこお金ももらえて価値も出る。そんな感じ（笑）。

維持費がすごくかかる。

でも味があるでしょ、すごく。

ちっちゃい庭作ったりして。

聞き手：日が差し込んでいるのがいいですね。

熊田さん：建築好きだね。

聞き手：はい。

熊田さん：ぼくも廃墟が好きだった。すごく魅力的で。

聞き手：言葉にはしにくい何かがありますよね

熊田さん：そこに人のあれはないけど居たんだ

聞き手：おもかげがある

熊田さん：それがまたかっこいい。生活感がないのがかっこいいっていう。（笑）

熊田さん：廃墟マニアってのが全国には結構いるらしい。兵庫県にNPO作って活動している人がいて、  
廃墟をホテルにしてよみがえらせるとか。

その人たちも　ヘリテージマネージャー。

\*\*\*\*\*～熊田さんに仕事の電話が入る～

聞き手：この近くにも廃墟ありますね。

熊田さん(妻)：つい最近、危ないということで撤去始めたね。

だれも住んでないときに中高生がタバコ吸ったり飲酒して警察沙汰になったりしたから。

このところ台風も地震もあって危ないし。

聞き手：持ち主の金でこわしているんですか？

熊田さん(妻)：わからない。少し離れたところに子どもさんたちいるけれど、なかなかこわしてくれなくて、町内の人困っている。

聞き手：自治体が最近壊せるようになったから、それでやってるのかなと思ったんですけど所有者がわかっているのなら請求できるのかなあ？解体費を回収できないみたいな問題かなと…。もうほとんどない感じなんですか？

熊田さん(妻)：まだ下の方はあると思う。前は三階建てくらいになってたよね。

\*\*\*\*\*~熊田さんが戻られる~

熊田さん：廃墟好きな人の話ししてたね。

わりと廃墟と古建築は、つながるからね。

古建築が、住まなくて、廃墟になる。

廃墟になっても、そのまま残っている建物は、なんかすごく魅力的なんだよね。(笑)

しかし木造の建物は 屋根がだめになると腐っていってしまう。

そうすると悲惨な状況になるし、周りにも迷惑かけてしまうから壊されてしまう。

ましてや町の中でそういうふうになると。

魅力的なんだけど、それは本意ではないので、「やっぱり残して使っていくという形にしていけないといけないのかな」というなかで、こういった活動をしています。

聞き手：ちゃんとした管理をしていたら何百年も残っていけるものなんですか？

熊田さん：そうなんよ。たとえば法隆寺あるじゃない。

聞き手：千年以上ですね。

熊田さん：そう千年以上たっているんだけど、まだしっかりとしている。

あれは、何回も何回も手を入れてきているんだよね。

部分的な補修ではなくて、一旦ばらしてもう一回組みなおしたりとか、かなり根本的な修理もやったりするわけ

日本の建築って木と土でできているじゃない。だから、

土はとる。骨組みだけにして、骨組みをまたばらしていく。

それで悪いところをもう一回新しいものに変えたりして、もう一回組みたてて、そこにまた土をつけて

いくみたいな。

聞き手：じゃあロンドンとかと違うのは、あっちは雨が少なくて、しかも石造りだから、管理が楽？

熊田さん：そう楽なのよ

聞き手：ちょっとほったらかしても壊れにくいし、管理に必要な維持費も少ないから、いっぱい残っているというわけですか？

熊田さん：そうそうその違いはあると思う。

## 環境・気候・風土が大きく影響していると思う

向こうは石というものが近いところにあった

日本の場合は石とかはあまりなくて、山があったから木があった。だからその木を材料として使って建築を作ってきたという文化だから。

その地域地域にあった建物というところになるから、そこがやっぱり違うかな。

だから古い建物というのは、ずいぶんと手を入れて守ってきている。

それをしないと長くもたせることはできない。

でもそれをしていけば長く持つから。

最初にやっぱり作るときにしっかりしたものを作らなければいけないというのは当たり前なんだけど、そのあとのメンテナンスというのもすごく大事、それはよく思うね。

## 人が住まなくなると急に建物って悪くなる。

どういうことかという、湿気が多い国だから 風を通してあげないといけない。

生活していたら窓を開けて換気するし、

雨漏りがしてきたら気づいてすぐ手を入れるじゃない。

だれも住んでいないとほったらかしになっちゃう。

そういう部分をちゃんと補っておけば長く持つという意味で、さっきの（古材文化の会の）見守るネットでは、

所有者の味方になって、相談にのって、フォローすれば、所有者の人も「守っていきたいという気持ち」を継続していけるかなと

聞き手：途中であきらめたりしちゃわないように？

熊田さん：そうそう。

そのなかで一つぼくがやっているのは

京都の八木町－亀岡の奥－に、古い農家の茅葺の家があるんだけど、

その所有者の人は京都市内に住んでいて、ずっと空き家になってるの。

でも所有者の人に「それを何とか誰かに使ってほしい」という思いがあって、それを探してほしいという相談があった

見守るネットに入らあって、ぼくが担当して探している。

「こんな物件があるんですけど、使いたい人いませんか」といくらか声をかけたら、その中に、「農業をやりたい」という若い夫婦がいて、見に来てくれて、「ぜひ使いたいです」と言ってくれて。

「まずは2年間、お試し期間で使ってみてください」と所有者の方、言わはって。

そしたらね、地域の方とすごくなじんで、地域の方でうまいことやらあって、それで「これからずっと生活していける」という自信が自分たちにもできて、去年、譲ってもらうことができて、正式に。

そういうふうなかたちで、その建物を若い世代に移すことができたっていうね。

そういう建物もある。

聞き手：2年間のお試し期間っていうのがいいですね。

熊田さん：そうそう。いきなりねえ、買って入って、「ああ地域の人とうまくいなくて、また手放す」ということになる。もともとの所有者の方からしてみたら、地域の方にも迷惑かけることになるし、自分の思いと違うから、やっぱり失敗したくないというのがあって。

それで2年間お試し期間をつくって

聞き手：その新しく住んだ人は知り合いだったんですか？

熊田さん：見守るネットの中にいる、あるメンバーの娘さんの仕事している先というのが、無農薬の野菜とかを販売したりしている会社なの。坂の途中っていう会社。

京大の農学部を出た人たちが立ち上げた会社で、全国で無農薬野菜を作っている人たちから物を買って、販売している。

それに関わっている人たちが何人か見に来てくれた。

そういう人たちは農業ができるいい場所を求めていたわけ。何人か一緒に。

その時に、京都芸大の学生や先生も見に来てくれて。アーティストもそういう場所さがしていたりするから。

そういうなかで一つの夫婦が使いたいと言ってくれてうまくいったという。

それ以外にも、これ（古材文化の会の会報）にもちょっと出てるけど、やっていて、でも山盛りそういう物件はあってね。

だからいま僕が思うのは、もっとたくさんの人がね、そういうことをやる。

それから一般の人たちが意識をもたないと、だめだと思う。

あまりにも日本人は、そういった意識が希薄で、やっぱりもうちょっとイギリスにみならしてもらって、古いものに価値を感じてもらいたいかなっていう。

そのためには 学校教育。子どものころから、そういうふうなことを教えていかないといけないかなと思う

聞き手：なんか、給食にパンが出るみたいな感じ から変えていかないと？（笑）

熊田さん：日本の持っているいい文化っていっぱいあるのに、それらの多くが今はあまり活かせていない。

例えば、お茶とかお花とか たくさんあるじゃん？

でも今の生活に、ほぼないでしょ。

聞き手：…しばらく考えて…ないですね。

熊田さん：でもあの文化というのは海外にはほぼないわけで、日本のオリジナルじゃない。

それをどうして子どもたちに教えないのか。

日本のオリジナルなそういった文化を子どものころから教えてあげて、それをずっと後世に引き継いで活かしていけるような形にしていってほしいかなと。

聞き手：日本の国民性というか、最近の日本人は、ヨーロッパの真似ばかりして、「世界の何かとばっかり比べている」という感じがします。

熊田さん：そうだね、外国の人の方が自分たちの国のアイデンティティを大事にしていると思うね。日本人は海外にばかり関心を向けて自分たちの国のことに関心をもたない風になっているかな。建築もその一つなのかなって思うね。

実際やってみるとすごく楽しいこともいいものもいっぱいあって。

それを学ぶきっかけがないだけかなって。

それを授業の中に一つ取り入れたりするだけで、ずいぶん変わるんじゃないかなっていう。

聞き手：たとえばどんな感じで授業に取り込めますかね？



熊田さん：たとえばね、小学校の時、お茶教室なかったかな？

聞き手：行きました。たまに、お茶菓子が美味しいの目当てで参加しました。

熊田さん(妻)：茶菓子も文化だもんね。

熊田さん：そうやね。

聞き手：そのころはちゃんと正座できたんですけど、今は足がしびれている～。

熊田さん：(笑) なるほど。

そういうのを授業に入れてみたりだとか、体験ができれば一つのきっかけになるもんね。

聞き手：中学校の頃に、民泊体験で、京都の南丹で民家に泊めてもらったことがあるんですよ。

熊田さん：へえー古民家の？南丹だったら八木の方じゃない。

聞き手：川がきれいでした。

熊田さん：そうなの。そういう体験がちょっとあると、大人になったときに「ああこれがよかったなあ、自分もこういう方に少し行ってみようかな」と思うきっかけになったりする可能性があるし。

聞き手：そうですね。知らないものはわかんないですもんね。

熊田さん：そう。

大人になってから学ぶことはもちろんあるけれど、やっぱりちっちゃいころから学んでおくことっていうのは、身につくよね。それが人間も作っていくことになると思うし。

いま数学とか国語とか社会とかそういう「勉強」ばかり詰め込んで、受験勉強じゃない。それも必要かもしれないけれど、やっぱり「文化」っていうものもちゃんと教えるっていうことは基本なのかなとぼくは思うけどね。ぼくらのころはそんな授業なかったねえ。

聞き手：「グローバルな人材」って、英語できるだけじゃなくて、「自分の国の良さをわかっていたり文化を語れるのが大事」って言われますよね。

熊田さん：そう、海外で日本人が自分の文化を聞かれると答えられないっていうよね。

でも外国の人ってのは、自分の文化を語れる。教育されているんだと思うんだよね。

聞き手：文化ってのは、国民性のあらわれというところもあるから。

熊田さん：そうだね。そう意味で今の日本人というのは日本人じゃないね、どこの国の人だかわからない。

聞き手：たしかに。

2人：(笑)

熊田さん：そういう意味で、空き家問題に取り組みたい・関心をもっているというのは素晴らしいことだと思うね。

やっぱり日本人が今まで目をそらしてきたことの結果だよ、この空き家問題は。

民家っていうのは、何世代もが一緒に暮らしてきて存在していたものだから、それを急激な核家族化によって人がばらばらになっちゃって維持できなくなったっていうものだよ。それはもう一度見直す。これからの生活に活かしていくことをもう一度考えないと、たぶん無くなっちゃうね。すごく生活と密着しているじゃない。それらは切り離せないわけで、(文化と生活を)切り離しちゃうと壊れるわけで、いかにして継続するかを考えると、「しくみ」を守らないと継続はできないよね。

熊田さん：さっき島根の方でやっていると言ったのだけど、島根にも同じような問題がいっぱいあって。いなかの人は、地方の人は、都会に出るでしょ。そうすると高齢化している地域がたくさんあって、空き家どころじゃなく過疎になって、そうなるとうと、その村がなくなっちゃったりという話になるわけで。そこに住んでいた人たちの「いなか」がなくなるわけだから。

聞き手：そう考えると大きな損失ですよ。

熊田さん：そう。大きいんですよ、生まれたところ・故郷がなくなっちゃうんだから。

聞き手：そういう意味では、「空き家対策でコンパクトシティ」なんて軽々と言ってられないですね。大事なところを見落としていた感じがします。

熊田さん：みんな一方向ばかりに向いちゃうじゃない。でも実は、もっと大事にしくなくちゃいけないことがあるんじゃないかっていうね。

地方分権っていうじゃない。東京に一極集中しちゃっているところを、もっともっと地方に分散していくことによって、「地方でも生活しやすくなる」っていうようなことも当然考えていかないといけないんだろうし。

聞き手：分散しておけば、万が一東京に何かあってもほかに住めるっていう。

熊田さん：うん、日本人ってこう（視野が狭く一点集中に）なっちゃうところがあるよね。

これだけのエリア・土地があるわけだから、いろいろな文化もあるわけで、それをうまくいかしていくような、視野をもっと広く持つというか、そういうのが大事だよな。

聞き手：たしかに日本人って、意見も考えも個性も一つにまとめちゃうようなところありますよね。

熊田さん：そう。だからおもしろくない。(笑)

聞き手：そういうところで、こういう活動をされているのはすごいなと思うんです。

熊田さん：ぜひ（活動の現場に）来てください。

今度ね、しょうでん(松殿)山荘って行って、  
宇治の方にあるんだけど、木幡（こはた）に大きなお屋敷があつてね。  
これは重要文化財になった建物なんだけど。

聞き手：重要文化財？きましたね！

熊田さん：そう！

すごい建物なんだよ。これは大正末期から昭和の初めにかけて建てられた、お茶をやる場所なんだけど。すごくたくさん建物があるんだけど、おもしろい建物なんだわ。立派な。

そこで、古材文化の会が「古道具と仕事市」というのをやりますと。

「いらぬものは宝物」というのを合言葉にして、

「古い家具とか建具とかそういったものの再利用を呼び掛けて販売します」という。

古材文化の会っていうのは、  
建物をもちろん残すってのはあるんだけど、  
どうしてもやむを得ず壊されてしまう建物ってのもいっぱいあるわけなんですよ。  
そういったところに、壊される前に行って、  
使えるものだったり残したいものを引き取ってきて、  
建具であったり家具であったりを、「古道具と仕事市」などで買って使ってもらう。  
そんなこともやっています

同時に、建物相談会ってのもやるっていう話にたしかになってたと思うんだけど。

ちょうど紅葉の時期でいいときだね。

#### 松殿山荘

公益財団法人 松殿山荘茶道会の Web サイトにて、山荘の紹介がされている。

<http://www.shoudensansou.jp/institution/index.html>

聞き手：どういうきっかけでこういう活動に参加しよう・やろうと思われたんですか？

熊田さん：僕はやっぱり古い建物が好きだったし廃墟や歴史的なものが好きだったから。「古材文化の会」ができた頃に知って、興味があったから入った。

それとやっぱり建築をやっていたからかな。

熊田さん(妻)：若林さん(若林広幸建築研究所)に勤めていた時は現代建築だったよね。

熊田さん：学校で建築を学ぶと近代建築を学んだよ。そうすると、新しいものを設計するっていう仕事にやっぱりなる。そうするとそういう方向にしか目が向いてない。

だけど僕は、もともと歴史的なものが好きやったというのがあったから、そういうなかで古いものも見ていて、独立する前くらいにこういった活動をしているところをのぞいてみたいと思って。「古材文化の会」に入って、すぐ独立して。

ここで活動する中で、やっぱり歴史的な建物にかかわる仕事っていうのが増えていった。そんな感じだね。

会員も結構多いんだよ。全国に250人くらいいるよ。

聞き手：すごいですね、寄付総額も。

熊田さん：そう結構な額、寄付もしてもらってるよ。会の活動的には、なかなかたいへんなんだけどね、みんなボランティアだからね。

聞き手：「古民家は維持費がたいへん」というお話がありましたが、ほかの家よりもたいへんということですか？

熊田さん：いやどうして大変かというと、たいがい建物が大きいんだわ。

核家族じゃないから2、3世代住んでいるわけで、その分でかい。

だから傷むところ・直すところが増える。

それと、時間が経過した分、今の時代の生活に合ったつくりにしようとすると、違いが大きくて、直しが大きく費用がかかる。

熊田さん(妻)：台所が土間だったり、トイレのかたちも違ったり。

熊田さん：でも新しい建物にはない魅力がすごくあるから、そこなんだよね。

正直、若い人に、「古民家を買って直して生活したら？」っていうのは、なかなか現実的ではない。いちからやろうとなったら、お金がかかるから、たいへん。

「さわって(直して)実際に生活できる人ってのは、そこそこ収入がある人」ってなっちゃうんだけど、

逆に、さっきの八木の例のようなこともあって、

若い人たちは元気だから、自分たちでその直しをやりようとするわけ。

お金ないけど元気だから。

聞き手：アメリカとかでやっているようなことですね。DIY。

熊田さん：そうそう。そういう人たちに、僕らも協力するよっていう。

聞き手：そういう若い人たちにSNSとかで魅力を発信していってもらえたらいいですね。

## 若いご夫婦が八木の古民家に移住して暮らしている事例

田舎暮らし部 ホームページ

<https://inakakurashi-bu.com>

熊田さん：そうそう。～八木の農家のWebサイトを見せてくださって～

こんなホームページつくってやってる、この家。これ自分たちで畑やってるの。

聞き手：楽しそう。

熊田さん：うん。

熊田さん：こういう部活を作って、自分たちでね、一緒にしませんかと。この子。

聞き手：いいですね。

熊田さん：すごいよ。こんなね、にわとりも飼ってね。

聞き手：楽しそう。

熊田さん：すごいやろ。

聞き手：すごい。

熊田さん：「年間5000円で何度もお越しいただけます」って。広いから泊るところもある。

人が住みだしてめっちゃきれいになった。

熊田さん(妻)：すごいなあ。薄暗くてさびしそうなところだったのに、見違えるよう。

熊田さん：いのししもさばいて、にわとりもさばいて。

あらいぐまもつかまえて 毛皮にしてぶらさげてあるよ。  
まだ27歳くらいの夫婦。

聞き手：すごいな。  
こういうことを若者がやってというのがすごくいい流れですね。

熊田さん：こうやって色々な企画もしてさ、人を集めているのよね。  
地域の人たちも高齢化しているから、若い人たちが来てくれると地域が活性化するんだよ。

聞き手：みんなハッピー、素晴らしいですね。きっと元々の持ち主の方も満足ですよ。  
熊田さん：そうすごく喜んでいるよ。

ひとつのきっかけで、所有者の方の思いがつながると、このような素晴らしいことになる。  
ほぼただに近いような金額で譲っちゃってる。

聞き手：それは価値がつかないからというより、そうしたいからですよ？  
熊田さん：そう。所有者の人たちの、「若い人たちに使ってほしい」という気持ちだよ。

聞き手：お金高くしちゃったら、  
熊田さん：そう。買えないから。  
聞き手：お金がある人が買って別荘にすると、  
熊田さん：そう。どうなるかわからないよ。

熊田さん：こうやってみんなに、「一緒にやりませんか」って言ってるわけ。  
熊田さん(妻)：内でももらわないで外に広げていくっていう考え方。

熊田さん：未来予想図なんてのも作っている。  
聞き手：楽しそう。

熊田さん：これが直してるところやね。  
聞き手：これが元の姿ですか。  
熊田さん：「助っ人募集」やって。  
聞き手：シロアリ…ですか。  
熊田さん：うん。でも、自分たちでどんどん直していったる。

すごく元気だし、気持ちがつよいよね。なんとか自分たちでするんだっていう。  
こんな大きな家をさ。  
聞き手：夢があっていいですね。

熊田さん：こういう人たちも いてくれるから、もっとこういう機会を増やすというか、空き家をこういうかたちにしていけるといいかなと。

ちょうどいいあれだね、参考になるかな？

空き家問題を今後どうするのか…。

今たとえばこの地域(熊田さんのオフィス周辺)の空き家ってさ、ほんまに毎年毎年増えていってると思うわ。

老人だけで住んでいる家が多いし、亡くなった方もいるし、老人ホームに入ってる方もいるし。そのあと家族が移り住んでるかっていうと、ほぼ来てないから、空き家状態。

何軒あるのか数えてはいないけど、年々増えてますよね。

これをどうするかってことを考えているわけだよね。

聞き手：はい。

熊田さん：所有者の人がどうしたいのかっていうのが、いちばん大事で基本になると思うんだけど。

あっちの角にある家も、一人暮らしをしていた方が亡くなられて空き家状態になって、娘さんが時々来て窓を開けたりしていたけど、たいへんだから売りに出されたそう。売れたけど、ほぼ使ってなくて空き家に近い状態だよね。

聞き手：別荘ですかね。

熊田さん：うん。そういうのってどうなるかわからない。

継続されている家(売れた家)はまあいいかもしれないけど、売れないままの家は、数年のうちに悲惨な状態になっていくから、所有者にはそれをどうするのか考えてもらわないといけなくて。

どうするのか、って考えるためには、アドバイスする人がいなければ前に進まないのかな。

そういう意味では相談窓口が必要かなって気がするね。

聞き手：そうですね、どうすればいいのかわからないって場合。

熊田さん：うん。さっきの「見守るネット」みたいなものを行政が作って、そこに来てもらって、

「どういうふうこれからしたいのか」とか、

「実際に使うことを考えているのか・使うのであれば何をしないとけないか」、

そのために一回「建物点検をする」とか、

そのうえで直すための「費用見積もりをする」とか、

あるいは「だれか使う人を探したい」のか、

もしくは、「所有はしておいて違う用途に変えていく」とか、  
いろいろな形・方法があるけれど、  
そういう方へ「進んでいくような仕掛け・仕組み」をつくっていかないと。

たぶん、離れて住んでいたら、自分の目の前にないから意識になくて、放っているうちに、傷んじゃう。  
そこをまずやらないといけないんじゃないかな。

聞き手：つまり、行政がアドバイザーのような窓口みたいなのをつくって、古い民家の持ち主と、それを直したり有効活用できる人とをつなぐプラットフォームが必要だと。

熊田さん：そういうなんが必要だと思う。

熊田さん(妻)：行政が関わらないと信用がないから、その辺のどこかにぽこんと相談所を設けたとしても、大丈夫なん？ってなるのもあるから。相談する人からしたら、行政が入っていたほうが信頼できるし安心。

聞き手：行政なら安心で、お互い信用できる。

熊田さん：うん。

熊田さん：だから古材文化の会は、京都市と一緒にいろいろやっているんだよね。

京都府文化財支援コーディネータ養成講座・京彩・ヘリテージマネージャーの養成講座もそうだし、京都市まちづくりセンターとも協力している。

京都市から相談を常々受けたりするのね。

ヘリテージマネージャーが各地域で活動できるようなネットワークをつくることで相談窓口ができればと思っている。

つまり、行政があたまにいて、各地域に相談窓口があって、  
そこでヘリテージマネージャーが相談にのり、  
こういうふうにしたい人がいるからこういう補助をお願いしたいと行政の方にあげる。  
税制を相談したり。  
こういう形になっていくと、動きやすいのかなと思う。

聞き手：行政ができるのは、補助金だけじゃなくて、そういう活動もということですね？

熊田さん：うん。行政が市民の生活を支援しているわけだから、そこに行政無しっていうのは考えられないな。

熊田さん(妻)：普通の人が建築家の人に話すのって難しいみたいで、どこにいるのかもわからないし、知り合いじゃないとだめだったり、敷居が高いように感じるらしい。

でも、行政がなかに入ると、いろんな人につなげてもらえるし安心だし信用できるし。

「相談しただけでお金取られるのでは」と不安があって言いづらいなんてのもあるらしいので、行政が窓口作ったほうがいいんじゃないかなと。



熊田さん：空き家に関していうと、いま国が空き家を調べることをさせていて。京都ももちろんやっている。ただ、調べているだけでまだあまり先に進んではいけないからね。

聞き手：調べるというのは、統計的にですか？それとも、個別にどういう状況かを？

熊田さん：どこにどんな空き家があるかを。

聞き手：とりあえず明確にしようってことですか？

熊田さん：そうそう。

地域の人から相談もあるわけじゃないですか、こんな空き家があるんだけどどうにかしてほしいとか。そういったものにも対応するんだけど、その前に、どんだけどこに空き家があるか調べておかないとってのがあって、やっていますよね。

ただ、調べるだけでは前に進まないの、相談にのれるように。

そういうわけで「古材文化の会」もやってるんだけど、

そんなにPR力はないから。

かといって、いっぱい来られても対応できない。

対応するためには人がたくさん要るんだわ。

だから「(相談窓口が) 地域ごとでできるといいよな」と思うね。

聞き手：行政には窓口を作ってもらって、ヘリテージマネージャーの人材も育成してもらって、どんどん古民家の方で経済を回していったらいい？

熊田さん：それに価値を感じてもらって、残そうという方向になるよう期待したいね。

そうすると、ただ壊すだけじゃなくて活かそうってなるしね。

最近では中国人がどんどん買って民泊にしていくのが増えているけど、あれはちょっとまずいんだよね。

聞き手：不動産投資ですね、まずいんですか？

熊田さん：日本の文化・建築のことを知らずに、金儲けのためだけに買っている場合があると思う。

聞き手：その家の歴史に興味があるわけでもなく？

熊田さん：そう。

民泊なんて今、流行りだから、ブームが過ぎたら、利用者が激減すると思うんだよね。

そうすると、儲からなくなったらやめちゃうと思うんだよね。

聞き手：民泊をやめる時に、ちゃんと古民家を使える人の手に渡るかわからないわけですね？

熊田さん：そう。それにその時には、改修されちゃってるかもしれないから。

聞き手：ああ、古民家としての価値を失っているかもしれないわけですね？

熊田さん：そうそう。

聞き手：で、魅力がなくて誰も引き取らず、壊すしかなくなっちゃう？

熊田さん：それがこわいよね。そういう危険性をいまずごく持っていると思う。

だから、建物の価値・魅力をきちっと行政が評価して、そのうえで、この建物のこういうところを残すのが大事だよと指導できるようになるとよいかな。

聞き手：中国人の持ち主にもアドバイスできるといいですね。

熊田さん：そうですね。そこまでもっていければね。

聞き手：それはいいですね。古民家の方も傷つかなくて済むし、中国人の方にとっても、その建物の価値や歴史を活かした民泊をやっていけることになって。

熊田さん：そうだね、そこまで行政に力を入れてもらわないとあかんなあ。

熊田さん：単に民泊があかんってということじゃなくて、古民家の正しい残し方をしてもらえるのであればと。

聞き手：そうですね、本来であれば、手を入れるほどいいものになるわけですね。

熊田さん：そうそう。だから関心を持ってくれる人が多いというのはいいことなわけで。

ただし、流行りだけじゃなくて、ちゃんと理解してくれて残していつてくれるって形にならないと。

石の建物に対して、木の建物って、さわりやすいからね。

聞き手：ああたしかに、素人でも何かを釘でつけたりネジをいれたり簡単にできちゃいますもんね。それを石にやろうと思うとなんとも。

熊田さん：石なんて壁こわそうなんてしたら家そのものが崩れてきちゃうかもしれないからね。下手にさわれないじゃない。

聞き手：なるほどそういう意味では、木の家っていうのは、

「若者が直そうって思ったらできる柔軟さ」もあれば、

「適当にやると簡単に台無しにしちゃうって弱さ」もあるわけですね。

熊田さん：そうそうそう。そういう特徴をもっているよね。だから大事にしてあげないといけないっていうね。

もともとね、日本は災害が多いところだから、建物をそんなに永久にもたせようと考えてなかったと思うの。

昔からたぶん地震も水害も多くて災害に悩まされていたなかで、木造の家に住まなくちゃいけない環境だった。すぐ倒れちゃうし流されちゃうし。

まあ壊れたら建て直せばいい、そういう感覚だと思うの。

だとするとね、「壊れたらまた建てる、壊れたらまた建てる、ということがやりやすいかたちで継続する」っていうのも一つの方法だろうから。

ただそのときに、壊れたその「同じものを使って建て直す」というわけで。

それも一つの方法としていいかなって。

何も地震が来たら絶対壊れないってわけじゃないし、命を守るようにすることが大事だから、建物を下手に重たくしない。

建物が軽いほうが壊れても死ななくて済むとか、そういう考え方でもいいかもしれないね。

日本にれんがの建物もあるけれど、やっぱり地震が多いから、壊れて下敷きになったらたいへんっていう。

だから今の日本の法規では、組積造はできないんだね。今の建築法規ではね。

空き家対策としては、

あと 意識付けかな。

大人はもちろんそうなんだけど、子どもからの意識付け。

歴史的なものに対する価値をしっかりと学んでおくことが大事だろうし。

聞き手：行政では、改修費など金銭面での支援・相談窓口・教育 でしょうか。

熊田さん：その3つが大事なところだと思うなあ。うん。

聞き手：ここに、もってきた質問があるんですけど…

どの程度までの傷み具合なら古民家が再生できるのか。再生しにくい古民家というものはどういうものでしょうか？

日本の木造建築の5%くらいが築50年くらい=古民家なんですけど、その全部が再生可能なわけではないですよ？

熊田さん：うーん、そんなことはなくて、多分どんな建物でも再生できると思う。

ただね、地震が多い国だから、建築の法規で、地震で建物が倒壊しないようにしないとイケないということで、人命を守るということで、基準を決めてるんだわ。

そうすると、今の新築と同等の性能をもたないとイケないということと言われるわけね。

そうすると、歴史的な建物は伝統工法で建てられているんだけど、

伝統工法ってわかる？

聞き手：くぎを使わない工法とかですか？

熊田さん：うん、簡単に言うと、

地面に石をおいて、そのうえに柱をたてて、

天井の下に水平方向に渡してある梁、これで骨を作っている。

そこの間に土をつけて壁をつくっている。

聞き手：基礎とかはないんですか？

熊田さん：そう柱の足元は石になってて、その上の骨組みが、地震がくると動いちゃったりするわけ。動くということとは、いうたら壊れてしまうかもしれないという可能性も高くなるんだけど、それを今の基準に合わせていくとなると、地面にひっついたり足元を固めたり、建物が変形しないように筋交いをいれなさいとか、なっていく。

そうすると、もともとの建物のもっている特徴から離れて行ってしまう可能性がある。

そこが難しいところ。

ただ、最近、伝統工法の建物のよさ。すなわち、動くことで揺れを吸収してくれるという考え方もあって

聞き手：免震構造に近い？

熊田さん：そう。そういうふうな考え方も認められるようになってきていて。

それがちゃんと認められれば、一つの方向としてやっていけるかなと

なので、再生するレベルについては

建築基準法以前にできた建物であれば、既存不適格と言って、所有者がよいのであればそれでよいですよという範囲もある。

ただ、変えるとなって、確認申請という許可をとらなかつたりしないといけないと、今の条件を満たす必要が出てくる。

だからやりにくいとすると、建築基準法にひっかかるような場合。

時代が違ってさ、考え方も変わってくるもんだから、避けられない。

聞き手：何回か話に出てきていることですが、

再生された古民家が、新築よりも価値があるのは、どういった部分でしょうか。

歴史的なものがまず一つと、その他に。

熊田さん：そうだね、あとね、日本の伝統的な建物に行ってみるとわかると思うんだけど、何がいいかという一つは、外と中がつながる建築なんよ。

ヨーロッパの建物は石やレンガでできているから、囲まれているの。

風など外からの侵入に対して、完全に囲って守るつくりだから、すごく閉鎖的。

日本のは、骨組みでできているから、外と内がつうつう。つながっているという建物なわけ。

時代劇なんか見るとわかると思うけど、めっちゃ寒そうな家だったりするじゃない。(笑)

建具も無い、ガラスも無い、みたいな。

聞き手：はい。

熊田さん：あれは、風通しがいいじゃない。夏は気持ちいい。でも冬はすごく寒い。(笑)

それはある意味、日本人が自然をすごく大事にしている文化があって、自然と一体になりたいという文化がある

聞き手：あ、西洋人は自然を支配するという考え方が強くて、日本人は自然をいかし一緒に生きる、みたいな。

熊田さん：そうだね。庭がその辺のところをあらわしているとおもうんだけど、すごく自然と一体化している。自然というものをうまく生活の中にとりいれながら、豊かな生活をこうなんかしたいという気持ちが表れているのかなと。

そういった文化というのは、歴史的な建物には感じられるし、最近の住まいにはあまりないところのかな。

やっぱり今の建物は、密閉性を高めて、冬も温かく生活したい。できるだけ周りとの音も断絶して、閉鎖的にしてるみたいなどこあるじゃん。

それと、もっと細かく言うと、一つのエレメント、パーツとして、縁側ってあるよね。自分の家にはある？縁側。

聞き手：ないです。ないんで、夏になると、縁側でスイカとか食べてみたいなって思います。

熊田さん：(笑)、そうか、最近の家にはそういうのがないから。

熊田さん：縁側っていうのは、外と中の中間領域になる。

聞き手：ああ、たしかに。

熊田さん：雨もあたらない。けれども風は感じるし、日も感じるし、外の空気も匂う。

そういった中間領域を設けることによって、屋外を楽しむことができる。

それも伝統的な建物のエレメントかな、大事な。

聞き手：洋風の建築にはテラスがありますよね、でもテラスに対してスペースが小さくて済みますね。

熊田さん：そうだね。

それに、部屋の延長になるから、人がたくさん来た時に部屋としても使えるし。

この家もそうなんだけど、ここに障子が入ってるんだよね、本当は。

今はずしてあるけど、障子を閉めれば、2つの部屋としてつかえるじゃん。

そういう形でフレキシブルに使える。

建具ひとつで狭くも広くもできる。部屋の数を変える事ができる。

聞き手：たしかにそれは、壁とドアで仕切られた最近の家には難しいことですね。

熊田さん：うん、できないよね。

まあ障子一枚だから、音も聞こえるし(笑)、気配ももちろんわかるわけなんだけど、でも、落ち着くよね。

聞き手：はい。

熊田さん：ある意味、合理的な住まいだね。

人がたくさん来たときは建具をばーっと開けて、みんなで大きく使いましょう。

人が少なければ狭く使いましょう。

そうすることで、光熱費も少なくて済むし、汚れる範囲も少なくて済むし。

そういう合理的な考え方もあるかな。そこが一つの歴史的建物の魅力。特長やな。

あと何があるかな、…材料だね。

さっき言ったように、「近くにある自然の材料」で家をつくってきたから、日本には山がありました。そこに木がありました。その木を使って作っているでしょ。だから、ほぼ木が家を構成している材料。

その使い方なんだけど、

柱材・梁材は、一本の木の真ん中の部分を、こう割って、使う。

でも木は丸いじゃない？

真ん中の部分は大きな部材に使って、

周りの残った部分はどうするかというと、ごみにするんじゃなくて、

薄く切って、床材にしたり、外の壁材にしたりして、雨をしのぐ。屋根材としても使う。

聞き手：ほーう、かしこいですね。

熊田さん；さらに、木の外側には皮がある。

その木の皮を何枚も重ねることで屋根材にしたりしている。

木の皮っていうのは、

聞き手：自然界で生き延びるために、

熊田さん：そう。そのために必要な外皮だから、雨や太陽をしのげるような脂分があったり、特性があるわけだね。

聞き手：人間が、動物の肉は食べて、毛皮を着るみたいなことと似ていますね。

熊田さん：そうだね。

そういうように、一つの木を全て建築材として活かしている。

聞き手：すごい。

熊田さん：すごいでしょ。

聞き手：すごい。

熊田さん：それが身近にあるから、お金が要らないじゃない。  
今だったら買ってこないといけないじゃない、お金出して。  
昔は全部、自分たちの周りにある山から木を切り出してきて、100パーセント使い切るという。

聞き手：そうだと、さっきのDIYの話じゃないですけど、周りがそういう環境ならば、元気があれば、自分で作れると。

熊田さん：そう。直すにも木を切ってくるとか。

茅葺の民家あったでしょ、あれなんかも、  
「すすき」を育てて大きくなったやつを、切って干して乾燥させて、  
それをやねに葺いてるわけ。

厚みがあることで、雨が全部流れ出る。  
断熱性能も高い。夏はすずしい。  
植物を重ねているから空気層ができるので、断熱性能が高い。

聞き手：でも維持費が高いつてのは、すすきが少なくなったからですか？

熊田さん：そうそう。材料も少なくなったし、やる人も少ないじゃない。

昔は身近にあって、自分たちで育てていたわけ。管理して使えるようにしていた。  
専門業者というよりは、自分たちが、周りの仲間で助け合いでやっていた。  
だから、お金は特に必要なくて。

時代の違いがもちろんあるけれど、  
ちゃんと材料を自分たちで育てて管理してきたという非常に賢いやり方だった。  
「お金なくたってできるんだ」みたいな。  
今だってできると思うんだよ。今の時代だって。  
でも、みんなお金をもつようになったから、買っちゃうという。  
だから究極だと思うね、あれ。

聞き手：今の新築には難しいことですね。

熊田さん：うん。でも、できなくはないね。

聞き手：壁が壊れたとかになると、断熱パネルを買いに行ったりってことになっちゃいますよね。

熊田さん；まあね。

熊田さん：これ(オフィスとして使っている再生古民家の壁)、土壁なんだよね。

土っていうのも、山に行ってとってくればいい身近な材料なわけ。  
それを寝かしておいて、藁と混ぜて塗り土の材料にしていって。  
柱の間に竹を編むの。細い竹を縦横に縄で編んで、  
それに土を両方からつけていって壁を作る。  
そのうえから、左官屋さんが こて で、土をフラットにおさえていく。  
「竹小舞（たけこまい）」っていうんだけどね。  
そういうやり方をして壁を作っていたの  
それそのものが断熱効果もあるし、湿気も吸ってくれるから、  
湿度の高いこの国には良いわけなの。

聞き手：かしこいですね。

熊田さん：そうなの。

そうやって人間は、日本人は、知恵を出して、自分たちの身近にある材料をうまく利用して、家を作ってきた。

それで、より快適な住まいというのを常に考えていたの。

それがやっぱり知恵だと思う。

今はお金出して買うでしょ、だから考えない。知恵を使わない。

そうすると知恵が出てこなくなる。

聞き手：そういうふうになって、実際の人にフィードバックが来にくい。

住んでいる人が、自分で家を改造できたら、

ちょっとの不満も改善して、どんどん洗練したものにしていけるのに、

いちいち頼んでお金出してやらないといけないうってなると、

ハードルが上がって、色々見逃して、

なかなかこう家自体が進化していくスピードって遅くなりますね。

熊田さん：そう。だからそこは結局、ハウスメーカーがどんどん知恵を出して、

売れる家をつくるわけですよ

で、消費者がそれをお金出して買う。

聞き手：「消費者」になっちゃうんですね。

熊田さん：そう。昔は自分たちで考えてオリジナルなものを作っていたんだけど、

今はハウスメーカーが考え出した建物をどの地域でも買える。

聞き手：昔のものは、共通性がありながらも、それぞれが一つの作品というか。

熊田さん：うん、そう。

聞き手：特徴を持っている



熊田さん：うん。その地域地域の家ができた。

だって、その地域にある材料を使ってつくるから。その地域に合った住まいにするから。

熊田さん：山がある場所、川に近い場所、違うわけですよ、環境が。

そうすると当然、そこに合った住まいにしていくじゃない。住んでいる人が。

一方、ハウスメーカーの作る家は、全国一律で断熱性能を高めておく方向で。

それが今の国の方針でもあって。

日本の気候風土の中で、どんな家がいいかというのを、

ハウスメーカーに任せるだけじゃなくて、

みんなで考えてつくってあげば、

もっとおもしろい家ができるし、家の文化レベルもあがるんじゃないかって思う。

聞き手：なんだか、IT界とベンチャー企業みたいですね。新しいものが出てくる

熊田さん：と思うよ。やっぱり考えないと。

不満なりがあって、考えて、

それによってこう、今までにないものが出来上がるし、洗練されていくわけですよ。

聞き手：それでもって、その不満を一番多く知れるのは、住んでいる本人だから。

熊田さん：そうなんよ。本人たちが何が足りるかそういうなかで考えていくわけで。

聞き手：そういう意味では、今まで住んできた人たちが、どんどん色々な不満を改善してきた古民家っていうのは、歴史と、その歴史にふさわしい価値があるってことですね。

熊田さん：そうなんよ。いいことに気がついたねえ(笑) なかなか気がつかないんですよ。

ぼくだって、建築やってこんなことしだしたから気が付いたけど、でもそれ以外のことには気が付いていないから。(笑)

やっぱり何かに気が付くためには、何かきっかけがないといけないじゃない。

そういうきっかけさえも、今はなくされちゃう時代っていうかな、すべて満たされちゃっててみたいな。

聞き手：それに、建てて壊してしかやらないのであれば、

進化のペースも建て替えのペースになりますもんね。

例えば、20年経って壊して建て変えるのであれば、

一回不満がでてきて、それを変えるのは20年後ですもんね。

熊田さん：そうだよね。

聞き手：建てて壊すばかりだと、逆に、建て変えなくていい部分まで建て変えちゃって、取り替えなくていいもの取り替えているんでしょうか。

熊田さん：そう。悪いとこだけ直すでいいのに、今は建て替えたほうが安いみたいなさ。それによってごみもすごく増えちゃってるし、地球環境がすごく侵されているわけで。

聞き手：それもまた大量消費社会の習性なんですね、いっぱいやってるからそうした方が安いみたいな。

熊田さん：そう。だからそうじゃないものは逆にこう高い。古い建物をさわるってことが高くつくってのはこういうところにもあるわけだね。

聞き手：その歯車をどこかでとめないといけないですね。

熊田さん：そうなんよ。そうじゃないやり方をすることで「メリットがこんだけあるんだよ」っていう、その辺をもっと出して。

聞き手：そういう意味では、教育の中で古民家に触れるっていうのはすごくいいですね。壊さずに改善していくっていう考え方・精神自体に触れるっていうことができるので、その人が将来、古民家に住まなかったとしても、自分の家が古くなった時に、「建て替えよう」じゃなくて「悪いとこだけ直してみよう」みたいな発想になるのかもしれないですね。

熊田さん：本当にそう。家だけじゃなくて、いろんなものについてそうじゃない？昔はみんなそうだったよね。ものを買って替えるなんていうものは考えなかった。

聞き手：そうですね、機械とかラジオでも「真空管がどうのこうの」言って直そうとしていたのが、今はもう、全部半導体になっちゃって、普通にやってる人は何もできないし、できたとしてパソコンの中身のパーツをちょっと取り替えるくらいですよ。

熊田さん：そうだよ、自分では何にもできなくされちゃったよね。

聞き手：消費者になっちゃった。

聞き手：古民家いいですね。(笑)

熊田さん：一回見に行く？さっきの八木の古民家。松殿山荘も。

聞き手：八木に、一回500円で野菜でも作りに行ったら楽しそうですね、ともだちと。

熊田さん：山陰線で八木駅まで行ったら、そこまでたぶん迎えに来てくれるよ。

古民家は、今の若い人たちには、子どもたちには、きっと新しく見える。

聞き手：一周回って新しい。

熊田さん：うん。

京都の町の中にあるのは、町屋なんだけど、

ちょっといなかにいくと、そういった民家がまだいっぱいあって。

町屋と民家は、だいたいその生活の様式が違うから、作りも違うんだけど。

あとね、民家園ってあるんだよ。地方のいろいろな場所に。

関西だと、吹田の服部緑地にある。

聞き手：どういう経緯で集まってるんですか？

熊田さん：それはやっぱり、「民家をみんなに知ってもらいたい」という建築士や、歴史の先生が、壊されてしまうものを引き取って集めてきたもの。

京都の丹後半島の大宮町にもあるし、

わりと全国のあちこちに、民家園というのがあるんだよ。

京都市の町中でも、たとえば山科区東野の近くに、いくつか茅葺の古民家は残ってる。

わりとよくみると、「これも古民家だ」という場合もちょこちょこあるんだけど。

西京区の大原野とかにもあるんじゃないかな。

聞き手：昔の日本人の精神はいいですね。

熊田さん：そうだね、健康的なんですよ

自然とともに生きて、こまかいところは自分で直していく。

聞き手：最近日本人が欧州からとりいれようとしていることですが、

自然を大事にしようとか、それこそ DIY なんて外国語みたいになってますけど、

元々自分たちがしていたことなんですね。

なんでもかんでも西洋を追いかけていてはだめですね。

熊田さん：うん。西洋人から教えてもらうことは、新しいこととして取り入れて、

自分たちのやってることは古くてだめだみたいなことがあるように思うけど、それってどうなんだろうね。

聞き手：実際、ヨーロッパから日本に来たことで進化したいいいこともあるんでしょうけど、

もう少し、「日本人として芯の強いところ」がほしいですね。

そういうところのなさが、現代社会のなんかこう、やるせなさというか虚無感とかにもあられているのかなあと思いました。

熊田さん：それもあるかもしれないね。

聞き手：日本人としてのアイデンティティが少なくなった結果、  
一個人としてのアイデンティティを持たないといけなくなっちゃって、  
お互い棘をもってぶつかっちゃうみたいなことがある気がします

熊田さん：そうだね、すごく今、閉鎖的になったじゃない。  
少し前までは、いろんな情報っていうのは人と接しないと入手できなくて、  
人とコミュニケーションを図ることによって自分の知識を養っていたけど、  
今はコミュニケーションしなくてもネットでバンバン入ってくるし、  
閉鎖的になってしまうような環境。

聞き手：しかも、SNSとかで同じような趣味をもった人たちとばかりまじわるので、  
「自分と同じような考え方ばかりが周りにいるように錯覚しちゃう」という現象が起こっているらしいですね。名前がついてたと思うんですけど。

熊田さん：偏ってるね。

聞き手：でもこのコンピュータ、ネット社会がなくなるとも思えないし。  
偉大な光の面もあるんですけど、  
人間がまだそれをうまく使える域に達してないっていう感じはしますね。  
生かせてない。

熊田さん：今から何百年後か何千年後かに、人間はどんな生き物になってるだろうね。  
生き残ってるかな…。

熊田さん：いろんな話ができてよかった。

聞き手：ありがたいです。おもしろかったです。  
空き家問題を調べていた時に、熊田さんのウェブサイトを見せてもらって、  
おおすごいーと思って、  
その時に、古民家の再生の価値を知って、これなら、  
「人間の価値観さえ変われば、新築に勝てるんじゃないか」と思ったんですよ。

熊田さん：素晴らしいホームページやったなあ(笑)、そんなふうに思ってくれる高校一年生がいたっての

は、よかった。

またなんかあったら来てください。

聞き手：また来ます。本当にありがとうございました。

## へリテージマネージャー（歴史文化遺産活用推進員）について

もっと詳しく知りたい方へ

・文部科学省 Web サイト

「地域文化で日本を元気にしよう！」文化審議会文化政策部会報告書要旨

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/bunka/toushin/05021601/013.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/05021601/013.htm)

「建造物の価値が専門家以外には分かりにくく、その文化的価値が認識されないまま放置されたり壊されたりしている」問題への解決事例として、

兵庫県のへリテージマネージャー制度のことが書かれています。

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/bunka/toushin/05021601/007.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/05021601/007.htm)

・文化庁 Web サイト

文化財>各種助成金・支援制度一覧>文化遺産を活用した地域活性化に係る取組への支援

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/chiiki\\_kasseika/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/chiiki_kasseika/index.html)

pdf 化されたパンフレット「文化遺産を活かした地域活性化事業～文化遺産を次世代へ継ぐ魅力ある地域へ～」

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/chiiki\\_kasseika/pdf/h25\\_26\\_pamphlet.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/chiiki_kasseika/pdf/h25_26_pamphlet.pdf)

p.6-7にて「文化遺産を活かした地域づくりの推進を図るための人材（へリテージマネージャー）の育成を先駆的に行っている取組事例」として、兵庫県におけるへリテージマネージャーの養成・情報発信事業の実施計画と効果が報告されています。

なお、このパンフレットでは、

p.12-13で茅葺き屋根の萱替え技術の継承等についての取り組み（兵庫県朝来市）が

p.14-15で歴史的建造物等調査事業が、住民主体で自発的に文化遺産を活用する取組につながった事例（新潟県新発田市）が報告されています。